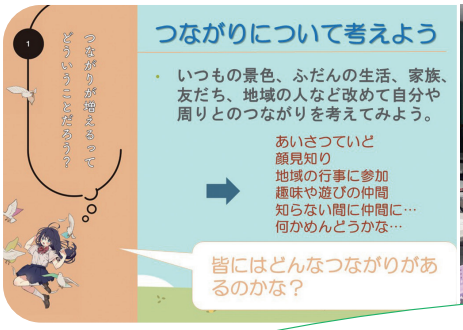
令和6年11月1日発行　毎月1回1日発行　ボランティア情報　昭和52年11月12日第三種郵便物承認

ボランティア・市民活動のコーディネーター・リーダー等推進者のための

ボランティア情報

2024 11月号 no.570



～つながる、広がる、福祉教育～

福祉教育　わたしたちの実践

静岡県　静岡市社会福祉協議会葵区地域福祉推進センター　伊藤 友一（いとう ともかず）さん（写真左上）
葵区地域福祉推進センター　市川 由梨（いちかわ ゆり）さん（写真右上）
地域福祉推進課　小泉 惠梨子（こいずみ えりこ）さん（写真下）

【学校に行くことが難しい子どもの社会とのつながりを育む】

きっかけは、静岡市社会福祉協議会（以下、市社協）にかかってきた１本の電話でした。電話をかけてきたのは静岡市青少年育成課の職員で、「福祉用具や福祉教材ビデオを貸してほしい」とのこと。改めて話を聞くと…。

用具やビデオを利用するのは「教育支援センター」（以下、センター。相談を受けた2021年当時の名称は「適応指導教室」）で、不登校状態にある小中学生の情緒安定や生活意欲向上、将来の社会的自立を支援する場です。センターでは、福祉体験活動として特別支援学校との交流を実施してきたものの、いくつかの事情から継続が難しい状況に。そこで、新たな活動を行おうと市社協に電話をかけてきたのです。

それまで関わりがなかったセンターからの相談に、市社協は「今まで意識していなかったが、そこには生徒がいる。ならば、学校と同じように社協にできることはないか」と考えました。センターの担当者から福祉体験活動の目的や要望を聞き取り、提案と話し合いを重ね、市社協によるワークショップと障害当事者との交流を組み合わせた福祉教育を実施することになりました。

ワークショップでは、子どもたちが自分の「外」に意識を向けるきっかけづくりをしています。地域活動のイラストを見て「この人は今何を考えているかな？」といった答えのない問いに対し、一人ひとり考えや思いを伝え合うことで、さまざまな考え方や思いがあることを知ったり、他者の気持ちを想像したりする機会となるようにしています。

障害当事者との交流では、ブラインドテニスプレイヤーとパラスポーツを体験したり、聴覚障害のある方から手話を学んだりします。当事者のなかには、子どもたちへのメッセージになればとの思いから、家族が引きこもりになった経験を話してくださった方もいました。

センターには、人前で意見を表明するのが難しい子どもがいます。そのため市社協は、子どもたちにワークシートに考えを書き込んでもらうようにしました。すると、生徒が一生懸命書き込んだものを読んだ担当の先生が「この子が自分の主張をこれほど出せるんだ」と漏らすほど、ふだんは自己主張が苦手な子どもが考えや思いを表現する機会になりました。

市社協は、「センターに通う子どもたちが社会に関心を向け、関わりをもつ機会になれば」と考え、今後も取り組みを継続していく予定です。

Contents

P.2▶ 特集 ボランティアの「今」から考えるボランティアの「これから」～ボランティア全国フォーラム2024　シンポジウム第2部要旨～
P.6▶ わたしにとってのボランティア
P.7▶ 「聴くこと、伝えること」を考える
P.8▶ 地域支え合いセンターってどんなところ？
インフォメーション

ふれあいネットワーク
社会福祉法人 全国社会福祉協議会

特集

ボランティアの「今」から考える ボランティアの「これから」

「広がれボランティアの輪」連絡会議キャラクター「ひろ君」と「ガーレちゃん」

～ボランティア全国フォーラム 2024　シンポジウム第２部要旨～

1994 年に設立された「広がれボランティアの輪」連絡会議は、ボランティア活動の推進・振興につなげるための環境・気運づくりを行っており、全国社会福祉協議会もその構成団体として当初から運営に参画してきました。本年は創設 30 周年を記念し、9 月 7 日（土）～ 8 日（日）、日本の災害ボランティア活動の転機となった東日本大震災の被災地・仙台市で、「ボランティア全国フォーラム 2024」を開催しました。

本特集では、「ボランティアは文化として社会に定着したか ～「広がれ」の実践を通じて語り合う～」をテーマに実施したシンポジウムの第２部、４つのスピーチと鼎談を行ったプログラムについてご紹介し、これからのボランティアのあり方や役割、可能性について考えるきっかけとします。

スピーチ 1

「若者が地域を支え、地域が若者を育てる」をビジョンに NPO 法人を立ち上げ、子どもが主体となって参画できる機会を創出

特定非営利活動法人 KEYS 事務局長
島根大学法文学部法経学科 3 年生 藤原（ふじはら） 睦己（むつき）さん

私とボランティアの関わりは中学生の時にまで遡ります。松江市では、中学生になると夏祭りや文化祭で、ボランティアとして地域と関わる機会があります。当時は生徒会長として、「もっと地域との関わりを深めるべき」という思いを抱きました。ところが高校生ともなると、地域とつながる機会がグッと減ってしまうという現実に気づいたのです。

そこで 2020（令和 2）年に立ち上げたのが「特定非営利活動法人 KEYS」です。島根県松江市の湖南地区で中高生を中心とした地域貢献活動を、継続的かつ主体的に展開するもので、地域と若者の相互支援をめざす NPO です。

KEYS の K は湖南、E はエフォートやエンパワーメント、Y はユース、若者、青少年、S は複数形を意味します。ネーミングに、若者が地域社会のカギになるという思いを込め、若者が地域を支え、地域が若者を育てるというビジョンを掲げています。KEYS は市内にある 7 つの高校や高専からなる 25 人のメンバーでスタートしました。自分たちで考えたことを実現するプロセスにワクワクしながら、充実感をもって地域に根ざした取り組みを続けています。

KEYS の活動のひとつに、毎年 1 月に開催しているリーダー育成研修会があります。もともと島根県には「ふるさと教育推進事業」があり、小学生になると地域のことを知り、中学生になるとその知識を活用して地域に出て還元するという活動を行なっています。こうした事業を背景にリーダー育成研修会では、社協や公民館の力を借りながらも、中学生が主体となってお祭りを企画しています。「自分たちが何をやりたいか」という視点から、意見を出してもらうようにしています。

ここで留意しているのは、子どもの関わりを示す「参画のはしご」です。これは、ロジャー・A・ハート博士による、子どもの参画のレベルを階層化したモデルで、階層の低い「操り参画」や「お飾り参画」、「形式的参画」は非参画に分類されてしまいます。子どもだからといって、そのような低い参画レベルにとどまるのではなく、ゆくゆくは、子どもが主導する活動に大人も巻き込むといったより高いレベルでの参画をめざしています。

実際に、中学生が企画したお祭りでは、クッキーを焼いたり、カフェを開いて小学生に対して接客したり、オリジナルかき氷を地域の人たちに向けて販売したりしました。

若者が主体的に行動するうえで、課題もあります。それは、伴走者としての大人の存在が必要なことです。子どもと同じ目線で関わりながら、支援する大人が欠かせないのです。

また、社会の変化や学校教育の制度改革などの影響で、活動を進めるうえでの調整も課題になっています。特に、働き方改革によって会議の時間に制約が生じたり、公民館の利用時間が限られたりすることもあります。そういったなかで、「ひとごとからわがごとへ」をモットーに柔軟な活動が求められていると考えています。

助成金情報
（公財）ニッセイ財団（日本生命財団）「都道府県助成　児童・少年の健全育成助成（物品助成）」
次代を担う児童・少年が健やかに育っていくために、定期的に継続して行っている活動を対象とし、都道府県知事の推薦に基づき助成します。
（詳細は「ニッセイ財団」で検索）

スピーチ 2

安心していられる場所がほしい 障害のある人を核とした文化創造発信拠点から、生きるためのコミュニティを市街地に実現

認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ理事長
久保田（くぼた） 翠（みどり）さん

2000 年に団体を立ち上げたきっかけは、重度の知的障害のある子ども・たけしを生んだことです。たけしは現在 28 歳。障害程度区分 6 で、強度行動障害もあります。当時、障害のある子どもが保育園に入れる時代ではなかったので、建築設計関係の仕事を辞めて子育てに専念しました。

子育ては楽しかったものの、つらかったのは私たちの居場所がなかったことです。たけしは音楽が好きで、何かの入れ物を見つけては中に石を入れて叩き続けるという行為をずっとやっていました。浜松市内のリトミックなどに通ったのですが、知育の時間になると参加できなくなり、走り回ったり、奇声をあげたりするので退散するしかなく、社会に居場所がないと感じました。自分たちが安心していられる場所をつくるために始めたのが NPO 法人クリエイティブサポートレッツです。

たけしは 12 年間特別支援学校に通いました。入れ物を叩く彼の行為は、学校では問題行動と言われました。これを問題行動と定義づけてしまうと、彼の行いを全否定することになるので、彼ならではの表現ととらえて全肯定しました。それが、日本財団の応援を受けてつくった 3 階建ての障害福祉施設「たけし文化センター連尺町」へと発展します。

たけし文化センターとは、たけし個人の示すやりたいことをやり切る熱意を新たな文化創造の軸ととらえ、一切を排除しない場所です。1 階は生活介護と重度の知的障害の人たちが好きなことをやるスペース、2 階は音楽スタジオ、3 階は一般の人はもちろん、重度の知的障害の人も泊まったり暮らしたりできるシェアハウス、ゲストハウスになっています。ここでは障害のある人とそうではない人が一緒になることでの学び合いがあります。

また、たけし文化センターは浜松駅から 800m のところにあります。中心市街地は誰でも通いやすい場所。交通弱者やお金がない人、若者たちが来やすい場所だからこそ、まちづくりに、お金だけではない価値観を埋め込んでいきましょうという提案をしています。「まちづくりを考えたら福祉にたどり着いた」がコンセプトです。

中心市街地は産業が主役ですが、障害のある人たちも包括した「浜松ちまた会議」という機会をつくったところ、企業の方がたが積極的に話を聞いてくださるようになりました。とくにコロナ禍後、時代が変わったと思います。いろんな人たちが幸せに生きるって何だろうと考え始めた、そういう時代が始まったと思っています。さまざまな協力を得て、1400 坪の広大な空き地でアートイベントを開催したり、私立公民館をオープンしたりしています。

このように、私たちがまちづくりに関わるのは、コミュニティをつくることが目的です。弱者が集まる、血縁や地縁でもなく、生きるためのコミュニティがみんなに必要な時代です。障害のある人たちはそれを先駆けて実現してきたのだと思います。弱さでつながるコミュニティを浜松市の中心市街地で実現したいと考えています。

スピーチ 3

医師と患者ではなく人と人として出会う「医師焼き芋」の活動を通じて、街の中に楽しさの総量を増やしていく

医師焼き芋＠東京国分寺市　代表
平沼（ひらぬま） 仁実（ひとみ）さん

東京都国分寺市で「医師焼き芋」という活動をしています。医師や看護師たちが焼き芋を販売しながら、住民との交流の場をつくるための地域活動です。この活動を始めたきっかけは、2021 年に国分寺市の「こくぶんじカレッジ」という地域事業に参加したことです。地域で何か活動を始めたいと思っている人たちが集まり、学び合いながらプロジェクトを立ち上げる連続講座です。そのなかで「医師焼き芋」という駄洒落からアイデアが生まれ、

助成金情報

（特非）プラチナ・ギルドの会「第 11 回プラチナ・ギルド　アワード」（2024 年 12 月 15 日締切）

社会課題解決に向け頑張る団体や個人の方を顕彰し、その活動を広く社会に知らしめ、協働・連動していくことで社会課題の解決の一助とします。（詳細は「プラチナ・ギルドの会」で検索）

面白そうだからやってみようということになりました。

構成メンバーは医師や看護師に加えて、広告クリエイターやフィットネスインストラクターの方がいます。活動はゆるく、7名のメンバーができる時に参加するスタイルにしています。

医師焼き芋のキャッチフレーズは「芋とお節介を焼いています」ですが、国分寺市内の八百屋さんで仕入れたお芋を地元のパン屋さんで焼いてもらい、地域の人たちにはお節介を焼いてもらっているというのが実態です。

この活動を始めた理由のひとつは、私自身がクリニックで家庭医として働きながら、病気だけではなく、目の前にいるその人や家族、地域を見ていると、健康とは単に病気がない状態を指すものではないことに気づいたことにあります。病気があっても健康な人がいる一方で、病気がなくても不健康な人がいます。健康とは、その人の体や心がバランス良く整い、幸せやウェルビーングと呼べる状態に近いものだととらえるようになりました。

そうした本来の健康を地域の人たちと一緒につくりあげたいと思い、医師として患者に会うのではなく、街のなかで人と人として出会う場所をつくることにしたのです。

活動当初は健康相談を前面に出したため、参加者に対して医師として積極的にアドバイスしていましたが、そうすると診察室での関係とあまり変わらないことに気づきました。そこでメンバーと話し合い、あくまで「焼き芋屋」として活動し、相談があれば対応するようにしました。すると、健康相談を受ける一方で、私からは育児の相談をするなど双方向でフラットな関係が生まれ、医師と患者という役割に縛られず、自然なつながりがもてるようになったのです。しかも、活動が楽しくなり、誰よりも自分たち自身が元気に、より健康になっていました。

そもそも、私たちはボランティアを始めようと思ったわけではありません。しかも、自分たちが楽しいから続けられる状態にあります。その楽しさが伝わることで、街の中に楽しさの総量、そして健康な状態が増えていくのではと思っています。

そして、私の子どもはこの活動に喜んでついてきます。親というか、大人が楽しそうにしている様子が伝わると、子どもたちが自主的に自分もやってみようと思うようです。そうした連鎖で、地域活動が広く未来に続いていくのではと考え、これからも楽しく長く続けていきたいと思っています。

スピーチ 4

ボランティア活動に欠かせない資金提供のしくみを確保しつつ、活動団体に寄り添いながら社会の基盤を支えていく

社会福祉法人中央共同募金会　職員
小田（おだ） 若奈（わかな）さん

私の所属している中央共同募金会は赤い羽根募金で知られる組織で、47都道府県にある共同募金会の連合組織です。全国で行われる街頭募金や学校募金にご協力いただいている皆さんに感謝しつつ、私の経験から資金提供の重要性について述べたいと思います。

私は学生時代に社会福祉について学び、高齢者への支援や地域づくりに関わるなかで、ボランティア活動とはいっても、お金が必要であることを痛感しました。もともと社会貢献活動や企業のCSRにも興味があり、中央共同募金会で働くことになったのは、福祉活動を広めるためにも資金提供の仕組みづくりが重要だと感じたからです。

これまでの経験のなかで印象的だったエピソードをふたつ紹介します。ひとつは、助成金事務局として赤い羽根福祉基金の業務に携わっていた時、応募書類だけでは分からない活動の苦労を目の当たりにしたことです。ボランティア活動はすぐに成果が出るものばかりではありません。1年や3年の助成期間では限界があるのも事実です。そのようななかで、団体同士が交流できる場を提供した時に、参加者から悩みの共有ができると喜ばれ、こうした場をつくることも資金提供者としての役割のひとつだと感じました。

もうひとつは、2020年のパンデミックの経験です。当時、都道府県共同募金会と連携し、緊急支援活動を実施する部署で働いていました。全国の学校が休校となった際、臨時休校中の子どもと家族を支えるための助成プログラムを立ち上げ、パンデミックで発生したニーズに対応する助成を行いました。私自身感染症に罹患したらどうしようと不安を抱えていましたが、先輩たちの「こんな時だからこそ支援が必要だ」という姿勢に励まされ、目の前にある事務フローの整備などを黙々と進めました。その後、活動団体の成果報告を受け、支援が実際に役立っていることを実感したのを思い出します。振り返れば、阪神・淡路大震災や東日本大震災の際も、大変な時だからこそ新しいしくみをつくって対応したという話を先輩から聞かされていたことも励みになりました。

活動する団体や社会に対して、私た

助成金情報

エフピコ環境基金「2025年度エフピコ環境基金」（2024年12月23日締切）

持続可能な社会構築を目的とし、①環境保全活動、②環境教育・研究、③「食」課題解決・「食」支援に関わる活動に関する幅広い分野を対象とします。（詳細は「エフピコ環境基金」で検索）

ちが担うべき役割についても考えています。例えば、活動する団体を応援しながら、その活動の必要性を社会に伝えていくことも欠かせません。また、助成する側として、うまくいかなかった活動にも寄り添い、向き合うことも大切だと思うようになりました。活動団体の声を聞きながら、どう応援すべきかを常に議論しています。移り変わりが加速していく社会にあっても、短期的な成果だけでなく、5年、10年と長期的に見守ることが、ボランティア活動の可能性を信じることになると思っています。

資金的なしくみは社会を支える基盤となります。今後も、先人たちの知恵を学びながら、次に訪れる困難にもともに立ち向かえるよう精進したいと思います。

4つのスピーチを振り返ってボランティアの課題と未来を語る

4つのスピーチには、ボランティアが文化として社会に定着するためのキーワードが散りばめられていました。そのキーワードを3人の識者が別の視点から見つめ、ボランティアの未来を語りました。

● コーディネーター

「広がれボランティアの輪」連絡会議会長／同志社大学　名誉教授／日本医療大学通信教育学部　教授　上野谷（うえのや） 加代子（かよこ）さん

今回は、各地でどのようなボランティア、市民活動が行われているのかを聞きました。藤原さんの話に補足するなら、松江市は公民館の中に昔は地域福祉推進委員がいて、教育委員会と福祉が一緒になっている土台があり、中学生や高校生がのびのびと活動できる背景があります。久保田さんは東京芸大の卒業生ということもあり、活動そのものが芸術と呼べそうなほど、混沌とした社会にエネルギーを注いでいるのが印象的。平沼さんの活動は、楽しく自然体でというのが素敵ですね。小田さんは、厳しい先輩に鍛えられてここまで来たのを私も見てきたので、これからも頑張ってほしいと強く願います。今回の4つのスピーチからさまざまなことを学びとってください。互いに助け合いながら学び合うことを続け、一緒に進んでいきましょう。

● コメンテーター

豊中市社会福祉協議会　事務局長／コミュニティソーシャルワーカー　勝部（かつべ） 麗子（れいこ）さん

本来、ボランティアは工夫ができるから面白いはずなのに、自戒を込めて言えば、行政や社協がその面白さを奪っているのではないかと思うことがあります。活動者を支えると言っても、やり過ぎると重くなることがあります。支えるばかりではなく、支援される側が参加できるように発想を変えていく必要があります。また、共同募金会について言えば、社会の動きにもっと敏感であってほしい。もうひとつ、2年めの市役所職員を研修する機会に、ボランティアの印象をアンケートすると「無償・ただ働き・偽善」といった返答があった。ところが、実際にフィールドワークに出て帰ってくると、それが「楽しさ・自分のやりがい・仲間づくり」に変わる。このギャップこそ、ボランティア活動が広がっていかない原因なのではと考えます。今回のスピーチを聞くと「楽しい」というキーワードがしっかり含まれていたことが、とても良いと思いました。

同志社大学 教授　永田（ながた） 祐（ゆう）さん

ボランティアや民間の皆さんの努力で、さまざまな福祉制度ができています。誰かを支援する時、専門職の方は病気や障害だけに目を向けて、制度に当てはめて、患者、クライアント、利用者として支援対象化してしまいがちです。本来見るべきは人格や個性、生活そのもののはず。平沼さんは医師として、そういった専門職の視点を外す活動をされた。外してみたらご本人も楽しかったのだと思います。久保田さんの活動も、「当事者を支援対象者化するな」という声ですよね。その人の個性を見ていくことで、活躍できる機会をつくっていくことが大切。藤原さんのお話は、「若者も支援対象者化しないで」ということだと思います。自分たちが巻き込まれるんじゃなくて、若者が大人を巻き込むというのが、すごく力強いと思いました。最後に、共同募金会は、こうした「支援対象化」せず、多様な人に役割をつくる活動を応援してほしいと思います。

助成金情報

（公財）ホース未来福祉財団　「2025年度 障害者福祉助成金」（2025年1月31日締切）

障害のある方々が健康的で明るい社会生活を営むために、環境を整える努力をされている方々に対して支援を行います。（詳細は「ホース未来福祉財団」で検索）

わたしにとってのボランティア

次世代によるボランティアのいま

若者によるボランティア・市民活動は、若者の視点や感性、若者だからこそできることを活かしながら広がりを見せています。こうした若者の活動や思いを紹介することで、若者たちにとって「ボランティア」とは何か、さらに社協 VC が若者とつながる地域づくりを考えるきっかけを提供します。

アノミー　リーダー
トライ式高等学院
小禄キャンパス 3 年生
玉城（たまき） 爽音（さやね）さん

第20回　沖縄県
アノミー

団体紹介

生徒が自ら課題を設定し調べて発表する学内の大会で、玉城さんが発表した子どもの貧困に関する調査報告に共感した高校生が集まり、昨年 8 月に設立。子どもの体験格差や教育格差の解消を目的に活動している。活動場所やメンバーは学内・高校生に限らず、取り組みを拡大中。

「子どもの貧困をなくす」という人生をかけられる目標を見つけ、挑み続ける

なぜ子どもの貧困問題に関心をもちアノミーを立ち上げたのですか？

祖母と伯父が教育関係の仕事をしていることもあり、わが家の食卓ではよく子どもたちが育つ環境について議論されていました。私が福祉関係に興味をもつようになったのは、そうした家族の影響があるかもしれません。子どもの貧困問題に関心をもったのは、中学 2 年生の頃です。関わりのあった先生から書籍を紹介してもらい、現代の沖縄にも貧困があること、また貧困の要因が複雑であることを知って衝撃を受けました。

子どもの貧困という大きな課題の解決に向けて、高校生にできることは何か？　「アノミー」はそうした発想から同じ学校の後輩と一緒に立ち上げた団体です。どんな活動をすべきかメンバーで話し合ったところ、最初に出たアイデアは「子どもたちの居場所をつくろう」というものでした。子どもと年齢の近い私たちだからこそ築ける関係性があると信じ、まずは児童館で学習支援ボランティアを始めましたが、実際の居場所をつくるには費用面や人材面でのハードルが高いことを知ります。そうした紆余曲折を経て思いついたのが、「ブックバンク」でした。

「ブックバンク」とはどのような取り組みですか？

「ブックバンク」は、セルフ形式で本を循環させる仕組みです。学校などに設置した本棚に、使わなくなった参考書や教材などを誰もが置くことができ、無償で持ち帰ることができます。沖縄県では約 3 人にひとりの子どもが貧困状態にあり、標準的な家庭が教材にかけられる費用は 1 か月あたり 210 円しかありません。これでは「英検を受けたいけど問題集を買えない」といった事態が生じてしまいます。

一方で、家庭によってはすでに使わなくなってしまった参考書や教材がたくさんあります。そうした眠っている本を必要な人に再利用してもらうことで、学びや体験の機会を増やし、教育格差をなくすのが「ブックバンク」のねらいです。「アノミー」ではこのプロジェクトを立ち上げ、全国に広めるべく、仕組みづくりや広報活動などを行ってきました。

リーダーとして活動するなかで大変だったことはありますか？

リーダーをしていると、メンバーの志気を高めるにはどうしたらよいのかと思い悩むこともあります。そうした悩みをボランティアのマッチングカフェで出会った那覇市社協の職員に相談したところ、「ボランティアへの関わり方は人それぞれ。つながりをなくさず、参加意欲の高いメンバーを大切に」と助言をいただき、とても励みになりました。

現在は「ブックバンク」の活動を起点に仲間を増やし、より大きな力で課題解決に取り組むことを目標にしています。高校を卒業した後も、人生をかけて「アノミー」の活動を続けていきたいと考えています。

風に立つライオン基金主催「高校生ボランティア・アワード 2024」で猿田彦珈琲賞を受賞

ここ、いいね！

子どもの貧困課題に気づき、自分に何ができるか？　仲間たちと悩み、仮説と検証で切り拓いた「ブックバンク」活動。企業やソーシャル団体が取り組む事業創造プロセスとも重なり、熱意をもって突き進む玉城さんの姿に感動しました。大学でも共感を得られる仲間を増やし、さらには持続可能な活動に向け資金調達にもチャレンジしていただきたいです。重要なのはリーダーの熱量です！

一般社団法人 N ボノ　代表
川本（かわもと） 文人（ふみと）さん

イベント情報

全国社会福祉協議会 / 日本福祉教育・ボランティア学習学会ネットワーク委員会
「日本福祉教育・ボランティア学習学会第 30 回とうきょう大会前日企画ワークショップ」2024 年 11 月 22 日（11 月 15 日申込締切）
福祉教育に対する意識や価値の高まり、取り組みの促進をめざし、福祉教育をどう伝え、住民の主体形成につなげるのかを考えます。

「聴くこと、伝えること」を考える

第8回

ボランティア社会を語る

この社会をいつも「福祉とは」とか「ボランティアとは」といった大枠から考えるだけでなく、自分に引きつけて考えてみてはどうでしょう。でも、どうすればいいのか戸惑いますね。そこで、誰もが備えている「聴くこと、伝えること」から考えてみます。

「聴くこと、伝えること」を改めてとらえ直す、それはこの社会への新鮮な視点になり、何より自分の発見にもつながるはずです。

「聴くこと、伝えること」こそが、あなた自身の確かな福祉力を生み出す、そう思っています。

福祉ジャーナリスト
町永（まちなが） 俊雄（としお）さん

1947年東京都生まれ。1971年NHK入局。「おはようジャーナル」キャスターとして教育、健康、福祉といった生活に関わる情報番組を担当。2004年からは「福祉ネットワーク」キャスターとして、うつ、認知症、自殺対策などの現代の福祉をテーマに、共生社会のあり方をめぐり各地でシンポジウムを開催。2011年からフリーの福祉ジャーナリストとして活動を続けている。全国社会福祉協議会全国ボランティア・市民活動振興センター運営委員、広報委員も務める。

寺子屋時代のこの国の初等教育は、「読み書きそろばん」でした。子どもが独り立ちするためのこの教育内容は今も引き継がれています。

「読み書きそろばん」の伝統的な教育は、近年になって大きく変わります。それは「話す」ことが加わったのです。背景にあるのは国際化です。国際社会では「パブリック・スピーキング」という能力が求められ、英語圏では、子どもの時からこの能力が鍛えられます。パブリック・スピーキングというのはその名称からもわかるように、日常のおしゃべりとは違います。「パブリック」というのは、聴衆を前にしたフォーマルな場でのことで、そこでまとまった形のスピーチをすることです。ここでの「話す」というのは、認識、考察、見解、といった重層的な性格を備えた自己表現です。「自分」を語ることです。

私たちのこれまでの社会風土では、口下手はむしろ純朴な人柄とされ、寡黙であることが美質とされてきたところがありました。でももう「男は黙って、高倉健」というわけにはいきません。とりわけ、現在の企業活動ではプレゼン能力の如何が業績を左右しますから、その技術能力がそのまま、その人の評価になります。

最近は福祉分野でもプレゼンは盛んです。しかし、私自身は福祉の語り口は、データを駆使した企業プレゼンとは異なると思っています。あくまで私の経験則であり私見ですが、福祉を語る時には、そこに「私」がいてほしいのです。一人の人間の想いや惑いも込めて語るのが福祉です。「べき」と「なければならない」という語法から離れて、思いを語るとはどういうことか。それは映像的であるということです。プレゼン資料のゴシック字体の行列を追うだけのプレゼンは、単なる情報伝達です。あなたが語る背景には、きっと誰かの涙や汗、笑顔があり、風景があるはずです。語りながら、脳裏には人の想いや懐かしい風景が流れていてほしいのです。

そのような「パブリック・スピーキング」は、人を動かします。聴衆のすべてでなくていいのです。そのなかのたった一人を動かせばいい、そのようにして語るのが、福祉の語り口だと私は思っています。

以前、私は聴衆を前にボランティアのことを話したことがあります。自分の小さな経験から、私なりの社会観につなげました。お手本などとは毛頭思いませんが、経験、気づき、批評、考察などの要素の不器用な組み合わせが見えてくるかもしれませんので、以下、その部分をご紹介します。

世間でボランティアのことを話すとほとんど必ず、「素晴らしいですね」といった反応があります。でもその「素晴らしい」とする反応は、実はこの社会の未熟が言わせているのだと、私は思います。私たちの暮らしはボランティアで成り立っています。お互い様、といった日常は、支え合う、与えあうといった互助システムが根付いていることを示しています。

そうした豊かな日常への関心を打ち捨てておいて、ボランティアだけに「素晴らしい」と反応するのは、その互助という責務の怠慢を誰かに押し付けているとする後ろめたさが、そう言わせているのです。

ボランティアの原義をご存知でしょうか。諸説ありますが、そのひとつがラテン語のボランタス、自由意志だと言われています。

自由意志というのはこの包摂の社会の大切な概念です。つまり、ボランティアが自由意志であるとするなら、そこには当然、「やらない」ことも含まれています。ボランティアには、ボランティアをやらないとする意思も含まれているのです。

ボランティア社会というのは、「ボランティア」をやらないとする自由意志を認めた上で、そこから、ボランティアをすることを自らが選択するという意思を、それぞれが見いだす社会のあり様です。それが本来のボランティア社会です。

自分の中を探り当てるようにして、自分の意思決定を組み上げる。そこに初めて「ボランティア」がみずみずしく生まれるのです。

書籍紹介

『月刊福祉』2024年12月号（全社協出版部）価格1,170円（本体1,064円）

特集は、「更生保護と地域福祉をつなぐ」。地域社会の変化のなかで、「更生保護と地域福祉がどのように関わり活動をしていくのか」「これからの課題は何か」を共有し、今後の連携・協働を考えます。

地域支え合いセンターってどんなところ？
～立ち上げ時の課題を知る～

災害時は、被災者をより適切・効果的に支援するために、被災地内外のボランティア・NPO、行政等との連携、協働が必要不可欠です。
本連載では、実際に災害 VC を運営した社協の取り組みから、災害時の連携や平時の取り組みについて学びます。

第2回　熊本県　人吉市社会福祉協議会

支え合いセンターを立ち上げて現場から見えてきたモノ・コト・ヒト

左から
藤田 程子さん　横井 祐一郎さん　堀 千晃さん
郡　祐資さん　松岡 誠也さん　河野 統子さん
森山 広美さん

令和２年７月の豪雨災害で立ち上がった災害 VC 11 月には支え合いセンターがスタート

令和２年７月、人吉盆地にとどまった線状降水帯による集中豪雨で水害が発生。死者 20 名、住宅被害 3000 棟を超える大災害となりました。日本三大急流の球磨川が貫流する人吉盆地ですが、これほどの水害は、昭和 44 年以来、実に半世紀ぶりとなります。

同月にはボランティアセンターを人吉市と隣接する球磨村と合同で設置。10 月からは独立して人吉市 VC が立ち上がり、被災から４か月後となる 11 月には支え合いセンターとして被災者の支援を受け継いでいます。支援の対象は市内の仮設住宅、市営住宅、みなし仮設、在宅など 3,277 世帯にわたる被災者です。

支え合いセンターの活動を通して気づいた課題と具体的な対処方法

支え合いセンターの立ち上げには苦労もありました。まずは人材とその割り振りです。当初の相談員はセンター長を含めた総勢 32 名。ここから仮設班９名と在宅班 20 名に分けています。センターに常駐して活動する仮設班の生活支援相談員は、公募しながら社協とつながりのある人に声がけしました。自宅から直接被災者を訪問する在宅班の地域生活相談員は、民生委員や高齢者等の見守り活動をしている方の協力を仰ぐことで、ようやく体制を整えることができました。

人員が揃ったところで在宅班を 10 班に分け、地域別に担当分けしたところ、被災者が多い班と少ない班が生まれてしまいました。できるかぎり地域住民に馴染みのある相談員を配置しながら、臨機応変に割り振り直すことで不均衡を改善しました。

また、相談員の主な役割のひとつは、被災者の方の声に耳を傾けることです。傾聴のスキルは相談員によって異なるので、当初は月に一度程度研修を行いながら経験の差を埋めるように工夫しました。

次に、情報の共有とデータ移行についての課題です。世帯ごとに被災状況を集約したデータベースが行政にあり、これを表計算ソフトのファイルで受け取りました。支え合いセンターの業務システムにデータを移行しようとしたところ、大半の項目を手入力する必要があり、センターと社協職員を総動員して乗り越えました。現在は情報共有システムの利用もあり状況は異なりますが、構築するシステムの仕様は情報の共有なども視野に入れて決めたいところです。

平時からの社協と地域とのつながりが活かされる

支え合いセンターの活動を通して実感するのは、普段の付き合いがイザというときに活きてくることです。地域の人とつながっていることで協力が得られ、被災者への訪問がスムーズになったことは数え切れません。同時に、支え合いセンターの存在は思ったほど知られていないことも実感しました。チラシなどを携行して分かりやすく説明することで、安心してもらうという場面も記憶に残っています。

人吉市社協として初めての支え合いセンターとなったものの、熊本県には平成 28 年の熊本地震を受けたセンター運営の実績がありました。経験のある県社協、県内社協からのアドバイスを受けながら、行政や関係機関と一緒に被災者の生活再建に取り組んでいます。

オープンカフェ（仮設住宅での茶話会）

インフォメーション

みなさんの「読みたい」で誌面をつくります！
読者アンケートにご協力ください

本誌がボランティア・市民活動に関わる皆さんにとってより価値のあるものとなるように、読者アンケートを実施します。いただいたご意見･ご感想を参考に、今後の誌面を作成します。あなたの「読みたい」「知りたい」の声をお待ちしております！

- 質問内容：これまでの企画・今後の企画について
- 回答めやす時間：１～３分
- 回答方法：QR コードまたは URL からご回答ください
https://forms.gle/XRGwCRoVLh46jBmx9

ボランティア情報 2024 no 570
社会福祉法人 全国社会福祉協議会
全国ボランティア・市民活動振興センター
〒100-8980 東京都千代田区霞が関 3-3-2 新霞が関ビル TEL.03-3581-4656 FAX.03-3581-7858
E-mail vc00000@shakyo.or.jp URL https://www.zcwvc.net/
発行人●池上 実 編集人●高橋 良太 制作●株式会社丸井工文社 定価●¥110（税込）※購読料は会費に含む